

第4回海外遺跡の旅「韓国中南部の古代文化に触れる旅」第一部

2003年7月28日

(28日) 釜山空港→鳳凰台遺跡→金海貝塚→大成洞古墳

今回で4回目となった「世界遺跡を巡る旅」は、2003年7月28日から8月3日の7日間、河上館長を団長とする総勢41名で韓国中南部に出かけた。

主な目的は日本古代文化の源流とも言える伽耶・百済・新羅の古墳・古代寺院・博物館に加えて、樞考研と報密な交流のある東亜大学校・慶北大学の資料館の見学であった。

梅雨明け直後の暑い7日間であったが40代から80代にいたるメンバーの食欲なまでの見学にいささか目を丸くするばかりであった。

釜山を出発して朝鮮半島の南部を東から西へ走り、漁港の町木浦へ。さらに大田へ北上、そこから大邱・慶州へ東走。南下して釜山へ戻るという高速道路の利用(1500キロ)がなければとても回れないハードな道のりであった。

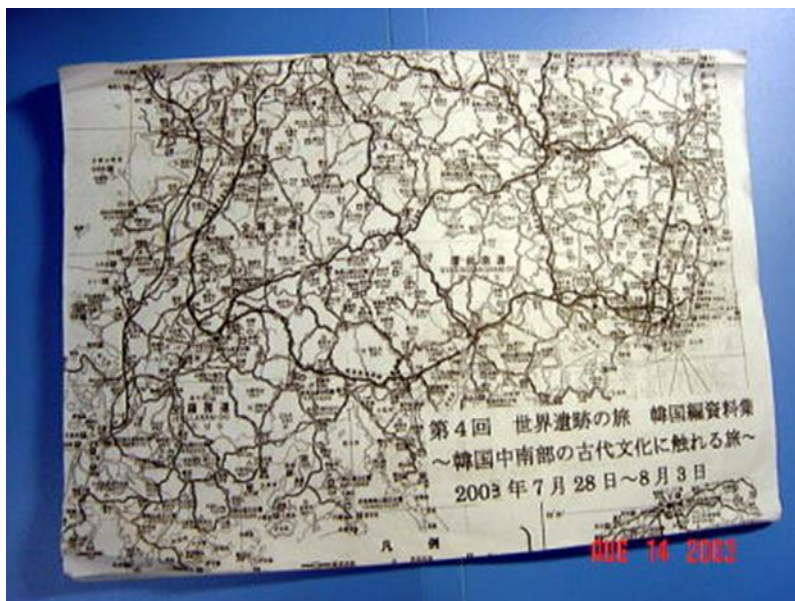
主な訪問先は二つの大学資料室、金海遺跡(貝塚・鳳凰台遺跡群の発掘現場)、金海博物館、大成洞古墳、福泉洞古墳、松鶴洞古墳、光州の月桂洞古墳(石室内見学)、木浦の海洋遺物展示館、扶余では定休寺址、軍守里廃寺博物館、陵山里古墳群、公州では武寧王陵の資料館見学ののち古墳群へ汗をかいて登る。八万大蔵経の海印寺、大伽耶の都があった高霊池山洞古墳群では地元の高霊新聞社とTV局の取材を受ける。慶州では皇龍寺跡の広大な伽藍跡に散る蓮華文の瓦片などを手にしながら昔日の寺勢をしのぶ。

海水洛客で賑わう文武大王海中陵から真打ちの舎羅里古墳群の発掘現場へ。現場では研究員の方から詳しい説明を受けながら、群集する積石塚古墳群の間を見て回る。

大学資料館では以前樞考研に留学された研究者の案内も受け、発掘中の現場見学など友史会ならではの充実した有意義な研修旅行であった。

恒例となった夜の、ミーティングも連日で、館長を朗んで酒を交わしながら熱心に質軽応答が続き、大いに親睦を図ることができた。(小川紘史)

はじめに



第4回 世界遺跡の旅 韓国資料集～韓国中南部の古代文化に触れる旅～

今回の研修旅行で戴いた資料は A4 81 ページにもなる大冊である。韓国時代区分・加耶文化・百済文化・新羅文化の概説から今回訪問する遺跡の地図、学術的調査図、解説、土器編年図、写真、遺物、遺構の時代的変遷、さらには 韓国考古学の歴史的推移そして、全南大学教授である林永珍氏の全南地域の長鼓墳(前方後円墳)に関する論文まで盛り込まれている。研修資料として戴いたが、果たして読みこなすことができるかどうか疑問である。

東亜大学校訪問



韓国では各大学に博物館施設が付属しているようで、この大学にも 1969 年以来、加耶文化圏を中心に発掘調査した遺物などがたくさん展示されている。最初の調査は福泉洞古墳(第1号-第10号)で、1969-1971 年にわたって行っており、館内の見学には親切、丁寧にご説明戴いた。

今回のドライバーとバスガイドさん



日本人観光者ガイド専門の国家試験（合格率 3%）をパスしたチェ・ウィスクさん。流暢な日本語を駆使して、日韓の冠婚葬祭の違いなど民族的な視点から説明してくれた。新婚旅行は日本で、子供さんもいるとのことであった。ウィットもあり、道中を一層楽しい雰囲気にくれた。ドライバーは朴周一さん。運転の腕前は一流、いつもほほ笑みをもって安全運転を心掛けてくれた。道中急ブレーキは一度もなかった。韓国は日本の左側通行と異なり右側通行で、バス席最前列でひやひやして通り過ぎる景色を見ていた。ときおりハングル文字に出会うと韓国に来ていることを感じたが、日本の田舎の風景と全く異なることはなく、山も田圃もあおおとしていた。

（1日目：7月28日）



SARS の影響もあってか、関西国際空港は空いていた。利用する者にとっては空いているほうがよいが、利用されるほうはこれでは困るだろう。朝 9:45 分集合に一人の遅刻者もなく、6泊7日の橿原考古学研究所附属博物館の河上邦彦館長を団長とした総勢 42 名の韓国遺跡研修旅行がスタートした。

釜山空港からバスに乗り込む



無事釜山空港に到着。釜山空港で入国手続きを済ませ、玄関口に出ると、これからお世話になるチャーターバスと最初の宿泊ホテルである農心ホテルに手荷物を運んでくれる荷物運搬車が待機していた。

首露王陵



首露王は西暦 42 年 3 月 3 日に亀旨峯に降臨し、九干に推戴され王位についた。六加耶の祖といわれる伝説の王であるが、現在、その王陵はその子孫といわれる人達によって整備されたものらしい。より立派に、より美しくという意識が働いたらしく、考古学でいう遺跡とは異なるものを見ているような気がした。

鳳凰台遺跡



鳳凰台付近遺跡発掘現場見学



鳳凰台遺跡は非常に整備が行き届いた高台にある。高地性集落の性格をもつ遺跡と聞いているが、頂上には駕洛国の石碑が建っている。また当時の住居や見張り台や防護柵なども復元されているが、高台に登るまでの舗装道路や周辺のビル林立風景の中に囲まれて、遊園地を散歩している気分であった。しかし、高台から下を見ると青いビニールシートが目に入り、明らかに発掘現場に違いない遺跡らしきものがあつた。遺跡の名称が分からないので、仮に鳳凰台付近遺跡としておくが、その現場に立つことができた。湿地帯に建物があつたらしく、横板が残っており、周辺の土手には白い貝殻の帯びなども見ることができた。係の人達が、乾燥しないように水を掛けて我々の到着を待っていてくれたそうである。それにしても、あまり便利とは思われないこのような場所で当時の人々は何をしていたのであろうか。

金海貝塚



前期加耶の中心地だった洛東江下流の海岸地帯には、多くの貝塚遺跡と土壙墓が発見されている。これらの地域では、日本との交流を明らかに示す縄文土器が見つまっているとのことであるが、ここは一見貝塚とはみえない高い場所にある。地形の変化によるものだろうか。どのように古い時代のさまざまな変化を読み取るのか、考古学の最も難しいところであろう。

大成洞古墳群



大成洞古墳からの遠望（金海市）



かつて金官加羅という国があったところの代表的な遺跡で、丘陵を囲む環濠も発見され、ここは居住村落であったとのことである。遺物や遺構から、この遺跡は3-6世紀の長期にわたって当時の人々の生活の舞台となったところであるらしい。すぐ近くに、大成洞古墳群の展示館が完成していたが見学することはできず、オープンは8月末とのこと。僅かのタイミングのずれで見ることができなかったが、また見る機会もあるだろう。

第4回海外遺跡の旅「韓国中南部の古代文化に触れる旅」第二部

2003 年 7 月 29 日

(29 日) 福泉洞古墳群→金海博物館→松鶴洞古墳群→晋州博物館→晋州城

(30 日) 光州博物館→月挂洞 1, 2 号墳→明花洞古墳→チャラボン古墳→木浦海洋遺物展示館

(31 日) 扶余博物館→軍守里廢寺跡→陵山里古墳群→百濟羅城跡→宋山古墳群→公山城

2 日目：7 月 29 日 (火)

福泉洞古墳群と博物館



福泉洞古墳群は釜山市街地の標高 50-60M 程度の大砲山という丘陵にあり、これまで 30 基ほどの古墳が発掘調査されている。木槨墓・石槨墓・石室墓などが時期と場所を異にして築造され、5 世紀代の古墳群からは土製の馬頭形角杯・冑や馬具類また山字形金銅冠なども出土した。金製品は少ないとのことである。出土物は新羅的色彩が強く、埋葬者は新羅の政治支配下にあったと見られているが、高句麗系武器や倭系土器などもあり、活発な、広範囲な交流が行われていたに違いない。

福泉洞古墳土器出土状況



福泉洞竪穴石槨墓（東葉）



松鶴洞古墳群（固城）



今回戴いた資料の中に、この古墳の測量図がある。それによると、6基の古墳があり、第1号墳が一番高い35Mに位置している。現在松鶴洞古墳群は韓国の史蹟119号に指定されている。国立金海博物館図録では、これらの古墳群のある固城地域の小加耶文化の調査があまり行われておらず、またはっきりした支配層の古墳群とおもわれるものも調査がないので、具体的に理解できないのが実情である。としている。現在、三色団子を並べたように美しくバランスの取れた古墳群の配置になっているが、復元するときの関係者のセンスが強くはたらき過ぎているように思われる。

3 日目 : 7 月 30 日 (水)

月挂洞 1・2 号墳 (光州)



全南地域の長鼓墳（前方後円墳）は 5 世紀から 6 世紀にかけて築造され、現在 9 基ほど発掘調査が終わっている。光州にはこの月挂洞 1 号・2 号墳と明花洞古墳が知られているが、いずれも横穴式石室を持ち、1 号墳は全長 45.3M、2 号墳は 34.5M の大きさの古墳である。月挂洞 1 号墳からは日本の埴輪とよく似た円筒形土器が出土し、時代や墳形や出土物からみて、どうも日本の前方後円墳をモデルにしたのではないかとされている。古墳のある周囲はビジネス街で、よく保存して戴いたなと拍手したい。

明花洞古墳 (光州)



1994 年に光州博物館により発掘調査された古墳で、栄山江流域の前方後円墳の一つである。全長は 33M、円墳部は 18M、方形部は 14.5M とさほど大きな古墳ではない。12 個の円筒埴輪が出土しているらしいが、6 世紀代の倭と朝鮮半島南西部との深い関係を示唆するものである。雨あがりの畑の赤土畦道をドロドロになって進んだが、竹や雑木が茂っていてよくその姿が確認できなかった。風水思想の感じられる立地条件にある。

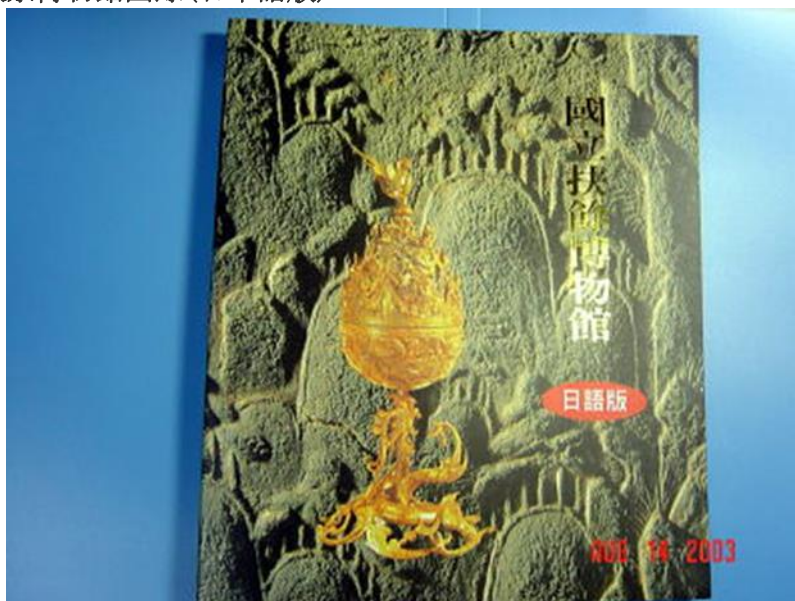
チャラボン古墳(スッポン峰古墳) 霊岩



チャラボンとは韓国語でスッポンを意味するとのこと。古墳がこのような形をしているので名付けられたらしい。生方文代さんという霊岩郡庁文化観光課勤務の日本人の方に案内していただいた。この古墳は竪穴石室をもった韓国でただ一つ的前方後円とのこと。全長 35.6M、高さ 5M 程度の大きさで、常日頃大きな古墳を見慣れている参加者にとっては驚くような古墳でもなかったが、何故こんなところに形態の異なった古墳が、畑の中にポツンと孤立しているのか気になった。この近くは日本に千字文をもたらした王仁博士の誕生地ということでもある。

4 日 目 : 7 月 31 日 (木)

国立扶余博物館図録(日本語版)



今回訪れた博物館や展示館では必ず図録を買い求めるようにしたが、日本語版も結構発行されている。因に、この国立扶余博物館図録は 30,000 ウォンで、日本円で 3,000 円くらいのものである。総じて物価が日本の半額くらいの感覚であるが、それに比較するとやや高いかなという思いはある。しかし、内容は奇麗なすばらしい写真が多く、図録作成には随分コストがかかっているように思われる。写真は 1998 年発行の 193 ページ日本語版図録である。

定林寺址



百済の典型的な『一塔一金堂』方式の伽藍配置の寺で、創建当時の五重の塔が残されている。扶蘇山を背後とした金堂基壇や講堂基壇、さらに東西の池の配置など創建当時の姿はさぞ立派で清楚な寺であったに違いない。

陵山里古墳群



これまで、8基の古墳が発掘調査されている。百済王陵があるとして伝承されているところである。発掘調査資料から、被葬者の階層によって古墳の構造が変えられているとみられており、玄室の幅と玄室の長さの比率に特徴があるとのことである。6世紀後半から7世紀代に広がった石室構造で陵山型石室と名付けられている。考古学専門の微妙な変化点なので、われわれ素人にはよく分からない。

百済羅城跡



当初は見学の予定には入っていなかったところである。陵山里古墳群見学後、河上館長がこの近くに羅城があるといって、急遽バスを移動させた。単なる観光コースを予定通り走らせている研修と違って、時・場所・必要にに応じて臨機応変に研修できる団長が味方にいるので、友史会会員にとってはありがたいことである。百済は3回遷都しており、聖王16年(538年)都を『南扶余』の国に最後に移したとき、羅城が築成されたといわれている。写真では、全体にきれいに整備されているが、黒く写っているところがオリジナルのところである。

宋山古墳群



今から、32年前の1971年7月8日、この宋山古墳群の中から世紀の大発見があった。未盗掘の武寧王の墓が発見されたのである。この絶対年代を確認できた陵墓の発見はどれだけ世界の考古学会の発展に寄与したことだろう。素人目にもその大きさが計り知れないことが分かる。

宋山里古墳群は 20 余基の古墳が三群 (A. B. C) にわたって分布しているとのことだが、B 郡の一番高い場所の古墳が武寧王陵で、5 号・6 号 29 号の古墳を従えているように見える。中国南朝の墓室を採用しており、出土物のすばらしさは言語を絶するとだけ記しておこう。倭で生まれたといわれる東城王(末多王)の後を継いだ武寧王、そしてその後を継いだ聖明王の 5 世紀後半から 6 世紀中頃の時代、倭では雄略天皇・継体天皇・欽明天皇らが登場して盛んに政治交流を進めている。事実はどうのような思惑があって、どのようなことを話し合っていたのだろうか。結局はすべてが実りあるものにはならなかったのではなかろうか。

公山城



何があるのか見てみたい。そんな思いで 30 分ほどのゆるやかな山の道程を登っていった。目についたのは、城壁と大井戸と石畳と門などである。三国時代の朝鮮半島では盛んに山城がつくられたらしいが、日本と異なり陸続きの国ではいつでも敵が宣戦布告なしに攻め込んでくるおそれがあるので、必然的にそうならざるを得ないのかもしれない。漢城から遷都した熊津時代の 60 余年間、短期間で更に遷都しなければならなくなった後の歴史を見ると、この城はあまり堅固ではなかったのかもしれない。

第4回海外遺跡の旅「韓国中南部の古代文化に触れる旅」第三部

2003年8月1日

(1日) 海印寺→大加耶王陵展示館→池山洞古墳群→慶北大学資料館→大邱博物館
(2日) フン皇寺→皇龍寺跡→感恩寺跡→文武海中陵→舎羅里古墳群

5日目：8月1日（土）

海印寺修多羅藏・法宝殿



海印寺は三大寺刹の一つで、加耶山（1430M）の側面にあり、ここには1236年から51年かけて彫造された81,200余枚の大蔵経が今も保存されている。保存にはさまざまな工夫がなされており、版木を収蔵した法宝殿の上下の窓枠の大きさを換気をスムーズに行えるよう物理的に変えているとの説明でであった。この大蔵経を室町時代以降、西国の大名らが盛んに要請し、実際に何本かがもたらされ、いまも残っているということである。寮舎の近くに、山から滲みでる水が竹樋を通して落ちてくるところがあたが、まさに甘露であった。

大加耶王陵展示館（高靈）



かつて大加耶といわれた国があった高靈地の古代古墳文化を復元紹介している。その内容は、主に池山洞古墳群の発掘状況の復元や出土物が展示されている。さまざまな角度から見学できるように館内は円形になっており、中央部に遺跡、周囲に出土遺物が配置されている。円の中を横切る栈橋もあり、照明にも工夫が見られる迫力ある展示館である。

池山洞古墳群



大加耶時代の5-6世紀頃の遺跡で、石棺墓・石槨墓・石槨室・石室墳など多様な形態の墳墓がある。頂上部の古墳群は王陵に比定される。全体的に細長い石槨がほとんどで、墳丘周辺に護石をめぐらした点に特徴がある。王陵級の44号墳にあたる石槨墳は、3基の主槨を中央にし、殉葬墳である32基の小形棺墓と石槨からなっている。このほか32号墳からは金銅冠・金製耳飾り・大刀・馬具・武具などが多数出土、内部に17枚の鉄ティが敷かれていた。とのことである。

テレビ取材



地元テレビ局や新聞社が友史会韓国遺跡見学風景を取材に来た。大加耶展示館では、蒸し暑い日であったが、地元の教育関係者がわざわざ、正装してこの地域の古代文化の説明にあたってくれた。ありがとうございました。

慶北大学資料館（大邱）



一大学の資料館としては立派すぎると思うほどの資料がある。市の文化財を移管したとのことであるが、見学時間が限られており、走るようにして見た。韓国文化財に指定されている石碑と石仏などが展示されている別館も見学することができた。入るのに鍵を開けていただいたが、平素は一般の見学者には対応していないらしく、錠前に蛛の巣が少しかかっていたように思われた。

6日目：8月2日（日）

フン皇寺



新羅が仏教を国教として公認したのは527年法興王の時、日本では磐井の乱が起こった年である。以後新羅国内で、仏教文化が花開く寺院が建設されて行くが、フン皇寺や皇龍寺はその初期の代表的存在とのことである。フン皇寺には日本ではお目にかかれない、情緒をもつ石塔があった。塔の四面の入り口両サイドにそれぞれ二体の獣像らしきものが守護している。敢えてその由来は確認しなかったが、中には絶対に入れないぞという決意の感じられる造形物であった。側にひっそりと夏スイセンが咲いていたのが印象的であった。帰りに瓦一枚を寄進する機会があった。

皇龍寺址



チャータバスは釜山発で、運転手のパクさんも皇龍寺址案内は初体験であったろう。河上館長が多分この辺であったと思うということで、独りバスを降りた。

ずばり正解で、すぐに広大な敷地面積をもつ遺跡が目に入ってきた。皇龍寺址である。現在なお発掘調査中である。作業風景は見られなかったが、随所に瓦片やよく分からないが土器片らしきものが土中から顔を出していた。かつてはここに九層の仏塔が建っていたらしいが、高麗時代に蒙古との戦いで消失してしまっとのことである。歴史的にそんなことがあったとは想像もできない、今は静かな明るい風景である。

感恩寺址



かつては神国寺とあったそうであるが今は改名され感恩寺になっている。

新羅が三国統一できたことを感謝するという意味を含めて感恩寺になったのではないかと金達寿氏の指摘である。百済寺院の伽藍の基本配置は『一塔一金堂』方式で、日本では四天王寺がその最初の代表と知ったが、新羅国にあるこの寺は『二塔一金堂』方文武海中陵(大王岩)遠望式で、奈良の薬師寺や枚方の百済寺址と同じような配置である。見晴らしはすばらしく、青空を天蓋として堂々としている。二塔はこれまで何を見てきたのであろうか。

文武海中陵(大王岩)遠望



文武王陵案内板



韓国も既に夏休みに入っており、海岸の砂浜には海水浴を楽しむ人達でにぎわっていた。笑顔が満ち溢れ、まさに平和な風景を見た。東アジア全体が騒然としていた7世紀後半頃に、かつての新羅の第30代文武王は自分は死んでも海の竜となって国を守る。墓は海に作れと遺言したと伝わっているが、このような光景がみられるのはそのお陰かもしれない。

舎羅里古墳群(慶州市)





現在も発掘調査中の遺跡で、現場に立つとあれこれと想像をかき立てられ、気持ちが高ぶっていつまでも遺跡にいたくなってくる。これまで原三国時代前期の土壙墓と後期の木槨墓や新羅時代の墳墓が調査された とのことである。130 号と名付けられた古墳からは7列63点の板状鉄斧が敷き詰められた状態で見つかっている。また棺の下の腰坑といわれるくぼみ穴からは有機物の痕跡があり、腰坑のあったもう一つの茶戸里遺跡との関連が注目される。

出土物には水晶・ガラス製首飾り・青銅鏡・鉄剣・銅剣・青銅釦・鉄斧・瓦質土器などあるとのことだが、これらの遺物がどんなものか見ることはできなかった。

釜山空港から帰国



8月3日(日)釜山空港 12:00 発 JAL 便で6泊7日の韓国遺跡研修旅行を無事終了し帰国。この間のスケジュールとしては、遺跡見学・博物館・大学資料室・発掘現場など総数 32 ケ所を訪問した。中にはこの研修企画に参画しなければ見ることのできない遺跡や展示室にも立つことができた。樫原考古学研究所附属博物館館長河上邦彦氏の見えざる労に感謝申し上げたい。ただ、余りにも集中的に多くの考古学情報を浴びせられ、未消化のまま帰国してしまったので、この後、誤りなくうまく整理できるかどうか疑問である。率直な指摘と河上館長のさらなるご教示を賜りたいものである。

参考資料

第4回 世界遺跡の旅 韓国編資料集

国立中央博物館図録

国立光州博物館図録

国立金海博物館図録

福泉博物館図録

国立公州博物館図録

国立大邱博物館図録

東亜大学図録

慶北大学図録

(文責 中根正喬)